

・ごあいさつ・

宝塚市立歴史民俗資料館旧東家住宅は、昭和49年の2月にもと宝塚市大原野字小林8番地にあった東 正雄氏邸を本市に寄贈いただき、昭和51年に現在の地に移築し、復元し、開館いたしました。

この建物の作られた年代は棟札などの資料がなく、確実なことはわかりませんが、建築様式などから、江戸時代の中頃の建築であろうと考えられています。

昭和40年代頃から急速な時代の変化によって、われわれの祖先が営んできた生活様式は、大きな変貌をとげ、それまで日常の生活のなかに生きていた用具はほとんど使われなくなりました。特に、電化製品の生産や自動車の普及により、大きく生活様式が変わりました。

それまでの衣食住や、農耕や漁業、狩りなどによって生活の糧を得ていた人々の生産や生業に使われた様々な道具、交易の手段、さらには交通の方法、社会習慣や、それぞれの土地に根づいた宗教、年中行事も地域社会の変貌によって、伝承されなくなり、忘れられようとしています。

しかし、これらの日常の生活から生み出されたものは長い伝統と文化に培われ、伝えられてきたものであり、庶民の生活の推移や文化を知り、理解を深めるうえで、欠くことのできないものです。

これらの資料は、たんに古き良き時代の郷愁としてのみではなく、宝塚市の文化や、しいては日本の文化を知る上で欠かすことのできない貴重な資料であります。

これらの資料や文化遺産を、次の世代へ正確に受け継ぎ、さらにわれわれの先人の残した文化へ深い畏敬の念をもち、新たな文化の創造へと発展させていくことを祈念し、ごあいさつと致します。

宝塚市教育委員会

・資料館の間取りと特色・

この資料館の間取りは、「ざしき」、「おいえ」、「へや」と呼ばれる三室から構成されています。

出入り口の土間の左側に「ざしき」（床つき）を構えており、その奥に「おいえ」と呼ばれる部分があり、ここは板間で、囲炉裏が切られており、居間として使われていました。

ここは「いろり」を中心として、家族が食事をしたり、色々な世間話しに花を咲かせたり、様々な団らんの間として重要な位置を占めていた所です。

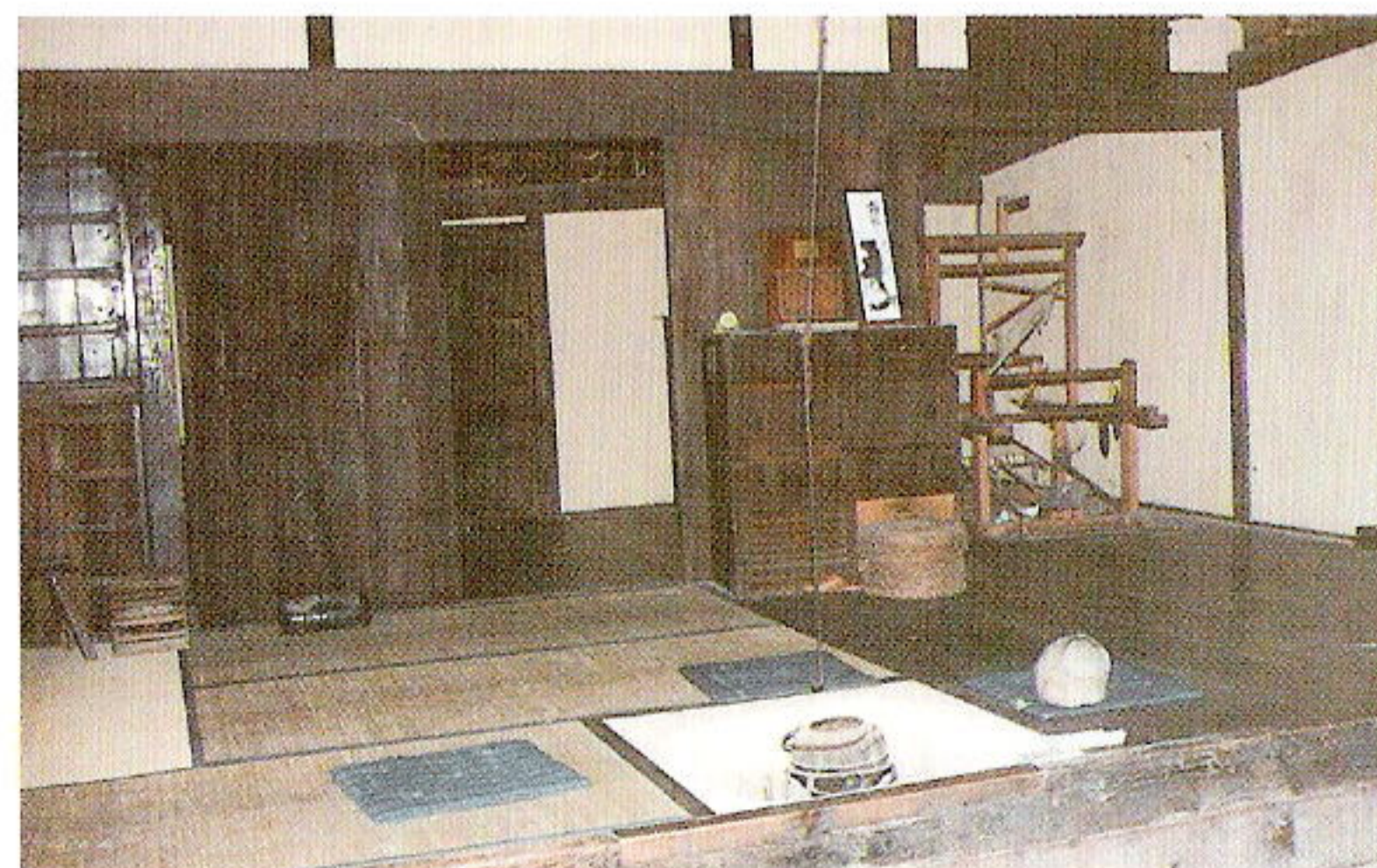
その横には「へや」がつくられていますが、ここは寝室や納戸として利用されたようです。

また「ざしき」は10畳で、床がついており、仏壇がおかれていました。その手前には幅1間の広い「えんげ」があり、その上部は二方に物置棚をめぐらせています。これは他に類例のない珍しい手法で、隣接の「こま」とともに後世、雨戸を縁外に移した際に出来たもので、もともとは、開放された広縁であったと推測されています。

ちなみに、こうした広縁の設置は、この地方の妻入農家に見られる特色の一つです。

土間は「そとにわ」と「うちにわ」にわかれており、「うちにわ」は炊事場になっています。

建築年代は棟札など確定する史料がなく、あきらかではありませんが、江戸時代中期頃のものと考えられています。一部に改築の跡がありますが、おおむね当初のまま残っており、この地方における三間取り妻入り農家の典型的な遺構として貴重なもので、昭和53年3月17日には、兵庫県指定重要有形民俗文化財に指定されています。



「おいえ」と「へや」

・昔の生活と衣食住・

この資料館には、いろいろな生活用具が展示されています。着るものは、普段の作業着として、野良着があり、「もんぺ」「てっこう」「きゃはん」などが使われ、そのほとんどが自家製のものでした。また、「ぞうり」「わらぐつ」「たび」といった履き物も自給自足のものでした。下着には「ふんどし」や「腰まき」「ももひき」等があり、「てぬぐい」や「ずきん」「ふろしき」などもよく利用されました。

食事は五穀（米・麦・粟・稗・豆）が中心で、副食には「ひもの」や「塩づけ」等の漬物や乾燥食品が保存食になりました。食事をする場所も決まっており、箱膳などを用いました。また神仏にも毎日お供えを欠かしませんでした。

住まいは気候風土によって大きく左右されますが、この地方では、冬になると比較的寒さが厳しいので、それに合わせた作りがされています。また家相なども問題にされたようです。屋根の茅の差し替えは10年程度で行われたようで、数十年に一度は、全ての茅がふき替えられたようです。

むかしの人々は、夜明けとともに起き、また夜おそくまで仕事をする人もあったようで、遊ぶ時間は現在と比較にならないほど少なかったようです。楽しみはお盆と正月などの「ハレの日」ぐらいでした。

特に八十八の手間をかけるといわれる「米作」に大変な労力を要しました。米作りはわが国では約2300年ほど前から行われ、日本文化の形成にとって、強い影響力をもってきました。



軒下と踏車